

「社会で生きる力」を 大学はどう育てているか

大学選びは“偏差値”から“マッチング”の時代へ。

大学入試も多様化が進み、

ますます大学の教育の中身を見ておくことが重要です。

どこで学ばわが子は伸びる？

保護者の時代とは様変わりした、最新の事例に注目していきましょう。

教育ジャーナリストが最新解説

教えて！今、大学での学びは
どう変わっているの？

渡辺敦司…………… p.34

変わる大学教育 最新事情 Trend of University

キャリア
教育

京都美術工芸大学…………… p.36
國學院大學…………… p.38
武蔵大学…………… p.40

新しい
学び

大阪産業大学…………… p.42
成蹊大学…………… p.44
大正大学…………… p.46
千葉商科大学…………… p.48
東京家政大学…………… p.50

教えて！

今、大学での学びはどう変わっているの？

保護者世代までの大学教育といえば、3年次までは「楽勝科目」と「鬼科目」の間をくぐり抜けながら授業を受けて単位をせっせと取り、4年次は卒論中心に取り組むものの、最終的には積み上げた単位が要件に達したら卒業証書を得られる——というのが、一般的な姿だったことでしょう。しかし、その後の大学は「変えています」。これから進学する子どもたちには、保護者世代とは別の心構えが必要です。今、大学教育は、どう変わっているのでしょうか。文部科学省の調査を基に、考えてみましょう。

教育ジャーナリスト **渡辺敦司**

教育専門誌を中心に、教育行政から実践まで幅広く取材・執筆。Webサイト「リクルート進学総研」に「教育トピック 教えて!」シリーズを連載。

卒業生像から立てる「ポリシー」が席卷

高校選びの際に説明会などで、その学校の「スクール・ミッション」や「スクール・ポリシー」について説明を受けた方も多かったことでしょう。実はこのスクール・ミッション／ポリシー改革は、もともと大学教育の改革手法だったものが高校に降りてきたものです。

大学には2017年度以降、「三つのポリシー（方針）」を策定・公表することが義務付けられています。①ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針、DP） ②カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針、CP） ③アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針、AP）——のことです。

大学受験生にとってAPは、今や入試要項にも必ず書かれていて、なじみ深いものです。しかし、APだけで完結するものでは決してありません。まずは各大学が社会から信頼される卒業生像を①で定め、そんな人材を育てるための手立てを②で講じるものであり、そんな4年間の教育に耐えうる学生を③に基づいて選抜しよう——という考え方に基づいています。

大学の時間をはじめとして、その学校で行われている「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び、AL）」についても説明を受けたことでしょう。探究学習に魅力を感じて高校を選んだ、という生徒も少なくないかもしれません。実はこれも、大学教育から降りてきたものです。大学教育界では「能動的学修」と訳されてきたものです。

〈図1〉を見てください。もはや三つの方針を策定していることは、大前提で、方針の達成状況を点検・評価して改善に取り組む大学が9割近くに上っているのです。

受け身では耐えられない「能動的学修」

高校の説明会では、総合的な探

究の時間をはじめとして、その学校で行われている「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び、AL）」についても説明を受けたことでしょう。探究学習に魅力を感じて高校を選んだ、という生徒も少なくないかもしれません。実はこれも、大学教育から降りてきたものです。大学教育界では「能動的学修」と訳されてきたものです。

当然、受け身の姿勢ではAL時代の大学教育に耐えられません。いつまでも先生の指示を待つのではなく、能動的に関心をもち、積極的に取り組む姿勢が、これからの大学生には不可欠なのです。

DXで予習・復習が必須になる!?

かつてのような座学一辺倒ではなく、討論や調査、フィールドワークなどを通して、問題発見・解決力、コミュニケーション力、リーダーシップなど、社会でも通用する力をつけさせようとするものです。

〈図2〉を見ても、ALを採り入れた授業を「実際に行っている」と回答した大学は、96・9%とほとんどです。今や実施は当たり前で、

ところで先ほど、ALを「能動的学修」と書きました。「学習」の誤変換ではありません。「学修」も大学教育の用語で、授業時間だけでなく予習・復習の時間も含めて単位を認定すべきだ、という考え方に基づくものです。これ自体は保護者世代のずっと前から変わら

図1 三つの方針に基づく大学教育の点検状況

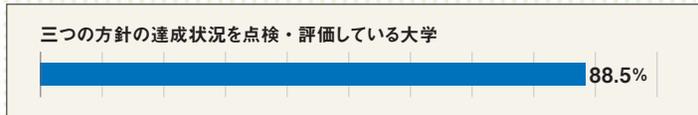


図2 カリキュラム編成上の具体的な取組

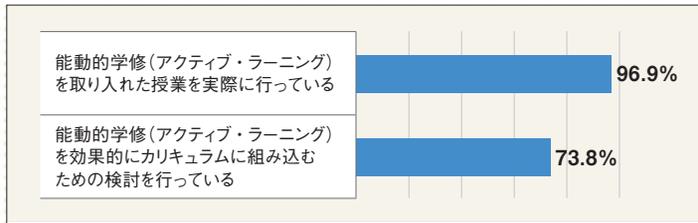


図3 情報通信技術(ICT)を活用した教育の実施状況

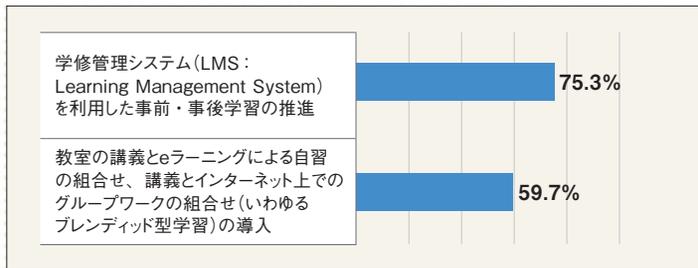
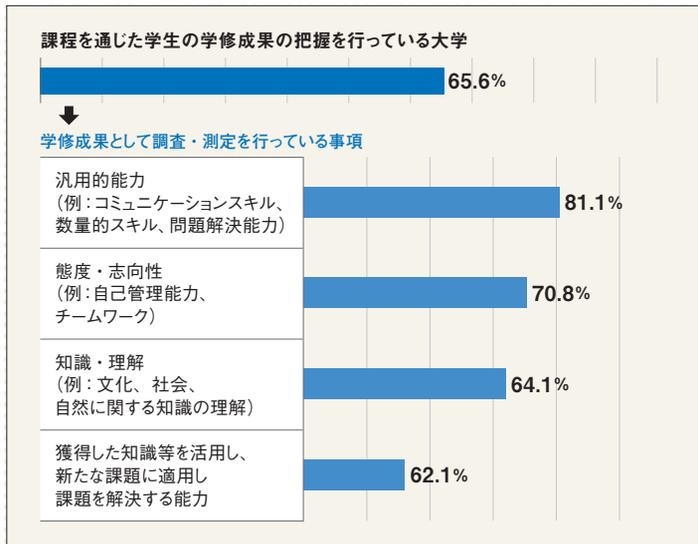


図4 課程を通じた学生の学修成果の把握状況



文部科学省「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について」より

ここまでは紹介してきて、今や大学教育で「何を学んだか」だけでなく「どのように学んだか」、その結果「何ができるようになったか」までもが問われていることがおわかりいただけたことでしょうか。

社会で活躍する力が昔と変わっていることは、何より保護者の方々が実感していることではないでしょうか。そんな社会の変化に敏感に対応して、大学の教育も今、転換期を迎えているのです。

今変わりつつある大学教育の具体的な中身に保護者も目を向ける 때가きているといえるでしょう。

ないのですが、今やその「実質化」が問われています。

そのことを本気で実現するため、その仕組みが「学修管理システム(LMS)」です。出欠管理から科目登録、教材や課題の配信とレポート提出、小テスト、学習記録、成績管理までを、1人1台ネットワーク端末を基に一元化するものです。

〈図3〉を見ると、そんなLMSを利用した「事前・事後学習の推進」を行っている大学が、75・3%を占めています。予習・復習をおろそか

eラーニングを含め
何を学ぶか問われる

にしてテスト前に一夜漬けをするとか、授業は代返を頼んでレポートは友達が書いたものを写して提出する、などという昔の手法は、情報通信技術(ICT)によるデジタルトランスフォーメーション(DX)・デジタルによる変革が求められる時代には、まったく通用しません。

「ブレンディッド型学習」にも注目して

ほしいと思います。コロナ禍を経て、今やオンライン授業はもとより、オンラインでも含めたeラーニングは当たり前になりました。

教室の講義とeラーニングによる自習の組み合わせや、講義とインターネット上でのグループワークの組み合わせによる学習が「ブレンディッド型学習」です。そんな「学習」手法を用いて「学修」を促すもの、と言えるでしょう。そんなブレンディッド型学習を導入する大学は59・7%と、既に半数を超えています。

〈図4〉にある通り「課程を通じた学生の学修成果の把握を行っている大学」が65・6%に上っているのにも、注目する必要があります。具体的な学修成果として調査や測定を行っている事項として、コミュニケーションスキルや数量的スキル、問題解決力などの「汎用的能力」が81・1%、自己管理能力やチームワークなど「態度・志向性」が70・8%、「獲得した知識等を活用し、新たな課題に適用し課題を解決する能力」が62・1%などとなっています。

今どきの大学教育では、ここまでの資質・能力が当たり前問われている、ということなのです。